

## 涙をぬぐって下さる主

ルカによる福音書7章11～17節  
2024年1月21日  
松田 基子 師

2024年の元旦の朝は、穏やかな暖かい陽の光りの中で始まりました。私達はその日に、大地震が起ころうなどとは夢にも思っていませんでした。多くの人達が故郷に帰り、親しい家族と共にお正月を楽しみ、北陸地方では、コタツに入って楽しい会話が弾んでいた家庭も多かった事でしょう。そんな家族団らんの最中、午後4時10分頃、能登半島を震源とするマグニチュード7.6の大きな地震があり、石川県で震度7を観測し、日本海側の広範囲に津波が到達しました。強力な地震は多くの家屋を押し倒し、コタツに入って楽しい団らんの中にいた方々をはじめ、多くの方々を一瞬にして、建物倒壊、土砂災害によって、その尊い命を奪っていきました。死者数は、災害関連死を含めて現在、232人、安否不明者が22人と報じられています。

残された者にとって、肉親の災害死ほど、その悲嘆感は強く、癒し難いものです。唯ただ神様の慰めと助けが注がれるようにと祈るばかりです。大地震など、自然災害による死や、交通事故をはじめ、様々な事故死によって、愛する者の命が突然奪われてしまった方々の中から、

「この様な事になって、神も仏もあるものか」と言う声が聞かれます。そこには、

「そう訴えずにはられない、心の苦しみがある」

と言う事です。それは当事者でなければ、分からない苦しみです。人間がどうしても抗し難いもの、それは死です。死は本人ばかりでなく、その人を愛する者に、耐え難い苦痛を与えます。死の解決はあるのでしょうか。

イエス様は死をどの様にお考えになっていたのでしょうか。ところで、イエス様はガリラヤ湖畔の北西部に位置するカファルナウムと言う所を

伝道の拠点としておられました。カファルナウムには、重要な商業路が通っており、多くの人々が行き交い、大勢の人々がイエス様の言葉を耳にし、その話しを聞く事が出来ました。今朝のルカ福音書7章1節から、ここには百人隊長の僕が癒された記事が記されています。

百人隊長は、ローマ軍に属するユダヤ人からすれば、異邦人ですが、ユダヤ人が信じる、天地万物を造られた神様を崇め、カファルナウムに会堂を建ててくれた程、神様を畏れ、敬う人でありました。この人が、ユダヤ人の関心を買うために、その会堂を建てたのではないと言う事が、分かる出来事が起こりました。それは彼の大事な部下が病気になり、イエス様なら癒して下さると、確信を持ちましたが、

「自分は異邦人であり、イエス様に直接頼みに行く資格はない」と考えたのです。

そこでユダヤ人の長老に、その事を頼みました。長老は喜んで、イエス様をお願いに行き、イエス様は彼らと共に百人隊長の許に向かわれました。ところが、その事を知った百人隊長は、急いで友達をイエス様の許に使いに出したのです。何故かと言いますと、百人隊長はイエス様の来訪に感激すると言うより、6節によりますと、

「主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ですから、わたしの方からお伺いする事さえ相応しくないと思いました。ひと言おっしゃってください。そして、わたしの僕をいやして下さい。わたしも権威の下に置かれている者ですが、わたしの下には兵隊がおおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また部下に、『これをしろ』と言えば、その通りにします」

と伝えたのです。

イエス様は、この百人隊長の信仰姿勢に、とても感心されました。そして、人々に向かって

「イスラエルの中でさえ、私はこれ程の信仰を見た事が無い」

と言われました。イエス様は、百人隊長がご自身の言葉に、絶対的価値を置いて信じていた事を、『信仰』と呼んでおられます。私達にもイエス様の言葉を何処まで信じて、賭けて行けるか、その信仰が問われています。イエス様の言葉に賭けることは、自分の全存在を、イエス様に委ねる事です。イエス様は次つぎに、その事を証明して下さいました。

イエス様はカファルナウムを後にして、ナインという町に向かわれました。弟子たちや大勢の群衆も、イエス様について行きました。当時の町は、城壁で囲まれていました。いくつかの門から出入りをします。門の内側は広場になっていて、そこで、町の政治経済は行われていました。農園や墓地などは城外にありました。12節を、見ますと、

「イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が運び出されるところだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた」

とあります。

イエス様の一行は、まだ、ナインの町には入っておられません。そこに、門から死者を墓地に葬りに行く葬列が出て来たのです。それは若者の死を悼む葬列でした。夫に先立たれた寡婦の、掛け替えの無い一人息子の死でした。

母親にとって、この息子が唯一の希望でした。夫に先立たれても、息子に心身共に支えられて生活が維持されて来たのです。母親は息子への愛が断たされたばかりか、生活の道も断たれてしまいました。死とは、この様に本人の存在が奪われるばかりでなく、愛する者を奪われた者に、耐え難い苦しみを与えます。

私たちはガザの地で、子供達の命が奪われて嘆き悲しむ母親の姿が、テレビの映像から目に入って来る度に、

『何故この様な悲しみ、苦しみを負わせる

のだろうか』

と心が苦しくなってきます。ですが、私たちにその苦しみが、どれ程理解出来ているのでしょうか。ルカ7章の、一人息子を亡くした母親には、大勢の人が付き添っていたのですが、その母親の深い悲しみを、真に、汲み取ってくれる人はいませんでした。人間の死を一番悲しまれたのは、イエス様です。

イエス様は、この母親を見て、憐れに思い、13節で、

「もう泣かなくてもよい」

と言われました。岩波訳では、

「主は彼女を見て、彼女に対して断腸の思いを覚え、彼女に言った。

『泣くのは止めなさい』

とあります。母親の悲嘆は計り知る事が出来ません。息子にはまだ、これからの人生があり、愛する息子の為なら、

『自分が代わってやりたい。神様、何故私でなく、息子なのですか。息子を生かしてください』

と、母親はどれ程、祈った事でしょう。しかし、神様は、息子の命をお取りになったのです。

この母親を最も理解する友であっても、母親の苦しみ、悲しみを思い計るだけで、同じ思いになる事は出来ません。そこまで深く理解する事は人間には出来ないのです。ただ、イエス様だけが人間のあらゆる苦しみ、悲しみを共に負う力を持っておられます。イエス様は、母親の苦しみ、悲しみを、お引き受けになって下さいました。

ところで、母親はここで初めてイエス様に出会っています。イエス様はご自身を信じる者だけを愛されるではありません。全ての人を愛しておられ、全ての人々の心に寄り添っていて下さいます。

イエス様は棺に近づき、手を触れられました。そこで棺を担いでいる人達は、歩みを止め、棺を担いだまま、立ち止まりました。すると、イエス様は、

「若者よ、あなたに言う。起きなさい」  
と命じられました。続いて岩波訳では、  
「すると、死んでいた筈の者は、上半身を  
起こし、語りだした」

と訳されています。イエス様はここで、棺の蓋  
を開けて、若者の手を取ったり、抱き起こしたり  
はしてられません。ただ、言葉を発しておら  
れるだけです。イエス様の言葉が、如何に権  
威あるものであるか、死人をも生き返らせる事  
が出来る権威あるお方である事が現わされまし  
た。

イエス様は若者を、御言葉をもって生き返ら  
せ、母親に返されました。

母親の嘆き悲しみを癒して下さいました。  
母親は喜びと平安に満たされました。イエス  
様はこの時から今日に至るまで、母親の我が  
子の為に胸裂かれる思いで発する心からの叫  
びに、常に耳を傾けて下さっているばかりか、  
最も近く、最も良き理解者として、その問題に  
断腸の思いで、寄り添い、優しく言われるので  
す。

「もう泣かなくてもよい。」

このイエス様の言葉で、涙をぬぐわれた経験を  
された方に、藤井圭子先生が居られます。

先生にとって、掛け替えの無い一人息子さ  
んが、先生と同じ医師を志して、念願の医師に  
なられて、1年足らずの時に、突然召されて行  
かれました。26才になられたばかりで、立派  
な医者になり、多くの人々の助けと、慰めにな  
る方でした。先生にとって、その悲しみ、苦し  
みは耐え難いものでありました。藤井先生  
は、著書、

【神の現実】

の中で(78頁)、息子が召されて、初めての彼の  
誕生日が近づくにつれ、

『私はどうしてその日を過ごせようか』  
と、その日を思うだけで、胸が潰れるような悲し  
みに襲われていました。

1月23日の朝を迎え、神様の前に座った  
時、ただただ神様への感謝が溢れてきたので

す。

「神様、27年前の今日、あなた様は、  
研太を私たちの子どもとして誕生させて  
くださり、感謝します。研太を与えられた  
ことで、私たちはどんなに嬉しく、楽しく、  
幸せな年月を過ごせたことでしょう。  
しかも、あなた様は、研太をあのような優しい  
人間に成長させ、成熟させてくださり、  
私たちを喜ばせてくださいました。

神様、本当にありがとうございます」と。

私には予想も出来ないことでした。イエス様が  
そうさせてくださったのです。聖書の中に、  
やもめとなった母親のひとり息子が死んで、担  
ぎ出されるのをごらんになったイエス様は、かわ  
いそうにお思いになり、その母親に、

「泣かなくてもよい」

と御声をおかけになり、息子を生き返らせて、  
彼を母親に返された出来事が記されています  
が、イエス様は、

「私にも、

『泣かなくてもよい』

と御声を掛けてくださったのです」

と記しておられます。

この様にイエス様はこれまで、どれ程多くの  
母親が、我が子の痛み苦しみに、

『自分が代わってやりたい』

と流す涙を、断腸の思いで受け止めて下さっ  
たことでしょうか。側らに寄り添い、

『もう、泣かなくてもよい』

と御声を掛けて下さいました。そのイエス様の  
御声に励まされて、イエス様に委ね、立ち上が  
り、歩き出した母親が、どれ程多く居る事では  
しょう。何故そんなに立ち上がらせる事が出来る  
のでしょうか。それは、イエス様の言葉には、  
**神の御子の権威があるから**です。つまり、  
イエス様こそは、人間の悲しみの涙の根本原  
因である、命の不安、存在の不安を解決して  
下さる、唯一のお方、**真の救い主、メシア**であ  
るからです。

16節を見ますと、

「人々は皆恐れを抱き、神を讚美して、

『大預言者が我々の間に現れた』  
と言い、また、  
『神はその民を心にかけてくださった』  
と言った」

とあります。旧約聖書時代には、預言者エリアが、列王記上の17章に於いて、飢饉を逃れて身を寄せた家の寡婦の一人息子が死んで、エリアの祈りに依って、

「生き返った」  
と記されています。また、列王記下の4章を見ますと、シュネムの裕福な婦人が、エリシャに祈りの家を造るなど、熱心に奉仕をして仕えたので、エリシャも祝福を祈らずには居られなくなり、子どもの居ないこの夫婦に、子供が授かる様にと祈って、子供が与えられました。ところがその子が死んでしまったのです。エリシャがその子のために神様に祈って生き返らせたと言う記事が記されています。

イエス様の時代、人々はエリア、エリシャについて良く知っていました。彼らはイエス様が、若者を生き返らせられたその事だけに驚いて、「エリアやエリシャの様な、大預言者が現れたのだ。」

そして、それは、  
「神様がご自身の民として下さった。自分達を心に掛け、助ける為に訪れて下さったのだ」  
と言って、**出来事だけを喜んだ**のでした。

しかし、イエス様は、エリアやエリシャとは違います。彼らは子どもの蘇生を、神様に祈って、神様の力で生き返らせて頂きました。しかし、イエス様は、神の御子であられ、ご自身でその力を持っておられました。そんな力あるイエス様が、何故神の御子の位を捨てて、人の子となって、この世に生まれて来られたのでしょうか。ヘブライ人への手紙の2章14節には、「ところで、子らは血と肉とを備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。」（肉体をもってこの世に人となって、生まれて下さいました。）

それは何故かと言いますと、

「死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした」

とあります。

では、人間をこの様に一生涯苦しめる死は何故あるのでしょうか。ローマの信徒への手紙の5章12節に、

「一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです」

と記されています。人間の祖から始まって、人間は皆、命の与え主である神様に聴き従うべきであるにも拘わらず、神様に叛き、自分勝手に、自分第一、自己中心に生きて、罪を犯して来たのです。罪の報酬は死なのです。

永遠の滅びです。ところが、命の与え主である神様は、ご自身に背く人類を尚も愛して、ご自身と一つ心で、人類を愛された御子を、人類の罪の贖いの為に、人の子イエスとならせて人の世に送られたのでした。

イエス様は、罪の無い神の御子の体に、全人類の罪を一身に引き受けて、身代わりの十字架に架かり、全人類の罪を償われました。神様はその御子イエス様の十字架の贖いを受け入れて、人類の罪の赦しの保証に、イエス様を十字架の死から**三日目に復活**させられました。それは**イエス様が、罪の報酬としての死を滅ぼし、勝利して下さった証明**でした。イエス様が、死の恐怖のために、一生涯、罪の奴隷の状態であった私たちを助け出し、**救って下さった**のです。**イエス様だけがその力を持っておられる**のです。イエス様が死に奪われた息子の為に泣く母親に、

「泣かなくてもよい」

と言われたのは、死を滅ぼす力を持っておられ、十字架に向かって歩まれるからでした。イエス様はその事を、寡婦の息子を生き返らせ

る事によって、お示しになったのです。

イエス様はヨハネ福音書11章25節で、  
「わたしは復活であり、命である。わたしを  
信じる者は、死んでも生きる。この事を信じ  
るか」

と問われました。信仰とは、イエス・キリストの  
言葉に、絶対的権威を置いて、信じる事  
です。

死をも制する力を持っておられるイエス様だけ  
が私たちの人生の、あらゆる苦難、死をも制し  
て、私たちに、

「泣かなくてもよい」

と言って下さるのです。私たちはどんな苦し  
みの時も、死の床に於いても、このイエス様の  
御声

「泣かなくてもよい」

を聴いて、イエス様に委ね、イエス様による全  
き救いを確信して、イエス様に全存在を賭けて  
従って参りましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

イエス様は私たちの人生のあらゆる苦難、悲  
嘆に断腸の思いで寄り添い

「もう泣かなくてもよい」

と御声を掛けて下さるばかりか、苦難、悲嘆の  
根源である、罪の死を打ち砕くために、身代わ  
りの十字架に架かり、死を滅ぼして下さり、永  
遠の命を与えると、宣言して下さいました。

私たちはイエス様のこのお言葉に、全存在  
を賭けて参ります。御聖霊が、弱い私達を最  
後までこの信仰に生きさせて下さるよう助け、  
お導き下さい。

救い主イエス・キリストの聖名に依って  
お祈りを致します。

アーメン。